

同立戦について考える

同立戦が一昨年、昨年と2年連続して開催されなかった。2010年までの第34回を数える歴史の中で、1970年から1978年迄の中断があったが、これは福井空港が一時的に使用出来なくなったという物理的な理由によるものである。他には1967年、立命館の全共闘による学園紛争のあおりを受けて開催できず、また2004年には同志社の部員不足(2年生以上で4名)によって開催が出来なかった年があったが、それぞれの翌年からは無事に回を重ねてきている。

今回の中断は、立命館の意向によるものであるが、2年連続はかつて無いことだけに残念で仕方が無いので、両校の部員、当事者からは距離を置いた一OBの立場で、同立戦——大学スポーツの対抗戦——について考えてみたい。

およそ大学間の対抗戦たるものは、どの種目をとって見ても、お互いをライバルと認め合う同士が、『他に負けてもここだけには負けたくない』という強い思いで競い合い、為にお互い切磋琢磨し合いながらも信頼関係と新密度を醸成してゆくものであるように思う。——『ライバルの居る幸せ』である。

そのためには、①ライバルに対する闘志の他に、②お互いに相手に敬意を持っているということが前提になろう。更に付け加えるとすれば、③その試合の価値観や部活動全般の中での優先度などにおいて双方に差が無いということが大切な要素であろう。その上で、④先輩達が試合を通して築き上げてきた歴史をしっかりと後輩に引継ぐ意思があることである。世間で「伝統の…」という冠を付けて呼ばれる大学対抗戦にはこれらのことが感じられるが故に、見る者の感動を呼ぶのであ

ろう。

このような観点から近年の同立戦を見た時、果たして“伝統の対抗戦”としての条件を満足していると言えるのだろうか？

前述の①は、いざ試合となれば両校共に負けたくはないと必死になるであろうが、②以下はどうであろう？これらこそが継続にとって大切な点であると思うのだが。両校部員に問うてみたいところである。立命館は2年連続同立戦を不戦とされたが、関関同立戦、関西東海には出場されていることから、特に③に述べたところで、両校の思いの差が大きくなっているのではないのだろうか？

あくまでも一OBの私見ではあるが、これらの条件に両校の温度差が大きくなった時、存続の可否を問わねばならない。何故なら、対抗戦としての意義を失っているかも知れないからである。

今後の同立戦をどうするのか？両校部員、指導者はOBの意見も参考にしながら、膝を交えてじっくりと話し合う必要があるように思う。